2023 年度
菅島しろんご祭り 体験記

三重大学 人文学部 3～4 年生

吉村真衣（編）

はじめに

人文学部／海女研究センター　講師
吉村真衣

2023 年 7 月 8 日（土）に、人文学部／海女研究センターの吉村と、吉村ゼミ所属の学生が菅島のしろんご祭りを見学した。

新型コロナウイルスの影響で、祭りが一般公開されたのは 4 年ぶりとなり、学生たちは期待に満ちた表情で島に下り立った。当日は 150 周年を迎えた菅島灯台が一般公開され、汗まみれでたどり着いた灯台からは忘れられない絶景を見ることもできた。

本報告書は、学生による当日の体験記をまとめたものである。

私どもを暖かく迎えてくださった菅島の皆さまに心からお礼を申し上げたい。

見て、歩いて、菅島の魅力に触れる

人文学部４年　西川きらら

はじめに

今回しろんご祭りを見学し、初めて生で海女さんの漁を目の当たりにした。これまでに大学の授業で、海女さんやそれらを取り巻く漁村について学び、少なからず知識をつけてきたつもりであった。しかし、海女さんの姿を自分の目で見て、漁村を自分の足で歩いてこそ得られるものがあると、今回の見学を通して実感した。海女さんについて、そして漁村について、自ら体験した率直な所感をまとめたい。

海女さんの個性

海女さんと言えば、身一つで海に潜り、アワビやサザエを捕って生活している人たちであるとまずイメージする。これまでの活動で、海女さんに会って話を聞く機会が何度かあり、海女さんによって潜り方が違うこと、性格ももちろんそれぞれであること、海や信仰への意識の差など、個性がいろいろと輝いていることは分かっていた。そして、今回の経験でさらに、海女さんの生き生きとした個性を目の当たりにした。

午前８時前、鳥羽マリンターミナルから出る船に乗って菅島へ向かった。９時前にはしろんご浜で宮司さんによるご祈祷が行われていた。ご祈祷が終わると海女さんたちは海に出る準備を始めた。ここで私は 1 人の海女さんに目を奪われていた。その海女さんは頭に手拭を巻き、ほどき、何度か巻き直してはほどきを繰り返していた。さながら水泳大会のスタート前に選手が帽子やゴーグルを微調整するようであった。しろんご祭りでは、最初に雌雄のアワビを獲った海女さんがその年の海女頭になる。手拭いを巻き直し、念には念を入れてコンディションを整えていたのであろうか。ともすれば、他の海女さんはすでに準備を終えて海を眺めていたり、タンポを抱えて移動し各々の場所に着いたりしていた。私が注目していた海女さんはというと、まだ手拭いを巻き直していた。

この日、目にすることができたのは十数人の海女さんであった。その人数だけでも海に入る前の動き方は本当に人それぞれであった。何年も海女さんとして海と向き合う中で、自分ならではの方法やルーティンを生み出してきたのであろう。百聞は一見に如かずということわざを身に染みて実感した出来事であった。

漁村の風景から考えること

雌雄のアワビの奉納が終わり、お神酒をいただいた後、私たちは菅島灯台へ向かった。灯台へ向かう山道は思っていたよりも長く、7 月上旬と言えどなかなかに堪えるものがあった。そんな時に、竹の杖を持っていたおかげで幾分か楽に灯台までの道を歩くことができた。その竹の杖はというと、漁港からしろんご浜へ向かう途中の道に、「転ばぬ先の杖」と書かれ

た看板と共に、何本も用意されていた物であった。私はすかさず、その杖をありがたくお借りして歩いてきていたのだ。菅島の方々の優しさが身に染みた。

灯台からの景色を堪能して、来た道を戻る。行きの道でも多くの人たちとすれ違い、挨拶を交わしていたが、帰りの道では年配の男性方に声をかけられた。「灯台まであとどのくらいですか」と聞かれたため、「もう少し行ったところです」と答える。すると「若い子のもう少しとは違うでなぁ！」とまだ先は長いと感じられたご様子。そう言いながらも笑顔ではつらつとした様子の男性に、こちらも思わず笑顔になった。地元の方ではないのかもしれないが、そのエネルギッシュさは菅島の地の良さが少なくとも影響しているのではないかと感じた。

灯台から戻り、1 人で島内を探索していると見慣れた建物が目についた。先ほど見てきたばかりの灯台がまた目の前にあったのである。観光マップと照らし合わせてみると、そこは鳥羽市立菅島小学校であった。小学校の校舎に灯台のモチーフを取り入れているとは何とも面白いと感じた。菅島灯台は令和 4 年には重要文化財に指定されており、菅島のシンボルとも言えるだろう。そのシンボルが小学校の校舎になっていることで、若い世代にも菅島の魅力が受け継がれていくと良いなと考える。

おわりに

今回しろんご祭りに参加し、漁村を見て回ったことで、自分の目で見て、足で歩いて、体感することの重要性を改めて感じた。また漁村のあたたかさ、人々の快活さから、エネルギーを得られたように感じている。今回感じたような魅力が、これからの世代の中にも芽生え、素晴らしい文化が受け継がれていくことを望むとともに、自分にできることは何か探してみたいと思った。

【参考】

鳥羽海上保安部「菅島灯台」（https://www.kaiho.mlit.go.jp/04kanku/toba/a/A-5-sugashima.html、2023/8/11 閲覧）

海女が繋ぐいのちの物語

人文学部４年　馬場ななみ

鳥羽マリンターミナルを出発すると、船は海上をものすごいスピードでぐんぐんと進んでいった。菅島に到着して真っ先に目に入った大きく色鮮やかな大漁旗が、遠い漁村へやってきたことを実感させる。太陽が照り付けるアスファルトを歩くうちに、祈祷がもうすぐで始まることを知り、急いで浜へと向かう。汗だくになって坂を上りやっと着いた浜では、13人の海女が砂の上に正座している。息を落ち着かせる間もなく、すぐに祈祷が荘厳な様子で執り行われた。長い沈黙の中に、波の音だけが聞こえる。頭を下げじっと目をつぶる海女の姿が印象に残っている。

祈祷が終わると、海女は奉納のため一斉に準備をし始める。中でも、波打ち際で静かに座り込んで海を見つめる海女の姿に心を打たれた。辺りには緊張感が漂っており、その様子から私は、漁が常に死と隣り合わせであることを改めて実感した。

奉納が始まる。

「プゥ～」

というどこか気が抜けるほら貝の音で、海女をはじめとする観客がどっと笑いだした。笑い声とツッコミの中海女は海へ潜り、しばらくすると大きな船がぞろぞろとやって来た。軽快な司会進行のもと浜は賑わい、観客は海苔あえや酒を口にしながら誰が一番にまねきアワビを捕るのかと海を見守っていた。無事に海女頭が決まり、奉納が終わった最後には、私にとって人生で初めてのアワビをおすそ分けしていただいた。一口食べると、アワビを捕ってくださった海女や漁村の人々はもちろん、海の恵みや、この時代まで守り続けられた伝統への感謝が自然と湧いてきた。

菅島を訪れる前、私はしろんご祭りを、海女をはじめとする地域住民や少数の記者のみで構成されるような、閉じられた行事だと捉えていた。だが実際は、予想をはるかに超える数のカメラマンや観光客、かつて島で暮らした元住民など、多くの人が祭りを楽しみにして菅島を訪れる、大規模な祭りであることに驚いた。しろんご祭りを一度体験すると、これほどメディアが注目する理由がわかる。それは、しろんご祭りを通して、海女が危険な海へと身体一つで潜る姿を間近に見るという非日常の空間を体験することで、私たちが普段何気なく生きている日常の奇跡を感じることができるからだと思う。私はしろんご祭りに、豊漁と海上安全の祈願だけでなく、海の生き物、人間、豊かな自然への感謝を忘れないという「いのちの物語」の伝承を感じた。しろんご祭りに参加できたことを、かけがえのない経験として誇りに思う。

しろんご祭りを通して見た海女と離島

人文学部３年　礒井香名

しろんご祭りに参加できることになった当初、現場の雰囲気をうまく想像できず、厳格な祭りなのかと考えていた。しかし、実際に行ってみると、浜に人々が集まっている中に島民の方ののんびりとしたアナウンスが流れ、牧歌的な雰囲気だった。もちろん、行事の中でも禰宜さんが祝詞を唱えたり、浜に座る海女さんたちを清めたりしている場面では厳格な雰囲気を感じたが、そこに響くアナウンスや法螺貝の音が絶妙に気を抜けさせる。そして浜での儀式が終わり、海女さんがアワビを探して潜っていったのだが、その間、子供たちは海で泳ぎ、大人たちは振る舞われる大漁酒を飲んで楽しそうにしていた。

海女さんがつがいのアワビを見つけて海から上がってくると、大きな拍手が起こった。そのまま白髭神社までアワビは運ばれ、神事が始まる。神事では、神事を行っている方々はもちろん、見守る私たちの間にも厳粛な雰囲気が漂っており、やはりこれは神事であるんだと実感させられ、背筋が伸びる思いだった。しかしその後、アワビが切られて振る舞われると、途端にみんなが集まってきて、わいわいと楽しそうな様子に戻っていった。初めて頂いた捕れたてのアワビは、とても美味しかった。しかし私にとって、神に捧げたアワビを食べてしまうというこの風習には、かなり驚かされた。

海女頭は必ずしも高齢のベテラン海女だけがなるものではないという。また、アワビを両手で捧げ持って歩く、海女着を身につけた若い女性の姿は、海女の古くからの伝統と新しい時代の両方を象徴しているようで、美しかった。

祭の最中に楽しそうな様子と厳粛な雰囲気の両方を味わえるのはとても面白く、不思議な気分になった。ぜひまた、地域のお祭りに参加したいと思う。

神事が終わった後は、灯台に登った。すれ違うみなさんが、余所者であるはずのこちらに挨拶してくれる。すぐに自分からも自然に挨拶するようになった。きつい山道だったが、菅島の優しい気質が見え隠れして嬉しい気持ちになり、行ってよかったと思えた。

お昼ご飯には、菅島でとれた食材が使われたお弁当を頂いた。離島らしく魚介類がふんだんに使われていてとても美味しかった。

そのあと、島の中を散策した。島にきてすぐにも思ったことだが、海がとても綺麗である。島の皆さんが海を大切に思っていることが窺えた。神社や小学校などを回り、島の方ともお話でき、とても楽しかった。

しろんご祭りに参加し、島の人たちとお話したり、菅島のパンフレットなども見せて頂いたりしているうちに、島の方々が島のことを守っていきたいと思っていることが分かり、それがとても印象に残った。私自身は島の人間ではないが、同じ三重の過疎地域の出身者として、地元を盛り上げたいという気持ちには共感する。またぜひ島を訪れてみたい。

菅島で感じた「あたたかさ」

人文学部３年　伴唯華

三重大学の演習の授業で吉村先生からしろんご祭りのお誘いを受けた。私が今までに鳥羽に行った回数はたったの 2 回。先生のゼミに入ったらいつかフィールドワークに行ってみたい！とずっと思っていたので、ついに念願が叶った。苦手な早起きを達成し、いつもなら起きてない時間帯に出ている電車に乗って鳥羽へ。そして定期船で菅島港へ向かった。

港に着いてから神事が行われるしろんご浜の方に向かうのだが、人が思った以上に多いと感じた。せわしなく人々が動いており何台もの軽トラや原付バイクが行き来していた。

しろんご浜の海を見てその透明度の高さに驚いた。ゴミが落ちておらず、貝殻も少なかったので波打ち際を裸足で歩くことができた。今日という日のために砂浜の清掃を行ったのかな、それとも普段からきれいさの維持に努めているのかな、などそんなことを考えながら砂浜を歩いた。

９時になり海女さんたちは一斉に海へと歩みを進め、そして潜り始めた。私は迫力のあるその姿を見て率直に「かっこいい」と思った。私だけでなく祭りに訪れていた人はこの瞬間を待ちわびていたのだと感じた。普段大学で海女に関する授業を取っているが、海女さんが実際漁をしているところをみるのはこの日が初めてであった。海上ではカチドと同時にフナドも行われていた。

開始から約 20 分経つとつがいのアワビが採れたので白髭神社への奉納が行われた。地元の方やメディア関係者そしてフィールドワークに参加している私たち……と神社の周りは多くの人で埋め尽くされていた。神事が終わると捕れたアワビを頂くことができる。私は人生で一度もアワビを食べたことがなかった。早い者勝ちなので食べられるかどうか心配であったが、「若い子が先」と地元の方が背中を押してくださったため食べることができた。

午後に菅島の散策をしたのだが、道端で会った島民の方が「この島出身の人は教育学部に行って先生になる人が多い」と話していた。菅島では若者や子どもの存在が大切にされてきていて、その思いが次の世代にも引き継がれているのかもしれないと感じた。

神事が終了し砂浜の方へ戻る途中に、私たちの名前が書かれているノボリを発見した。私たちもノボリを奉納できるよう取り計らっていただいたと聞き、住民の方に歓迎されていることを実感し、嬉しい気持ちになった。いただいた菅島産の海苔あえもとてもおいしくご飯のお供やお酒のつまみにぴったりである。

この日の経験は私にとって初めてのことばかりであった。私の実家は海の近くであるが海と関わる信仰とは無縁だったため、大漁や海上安全を祈願するしろんご祭りの一連の流れはとても新鮮なものだった。私たちを歓迎してくださった菅島の方々には感謝してもしきれない。また機会があれば菅島を訪れてみたいと思う。

島の景色に溶け込む信仰

人文学部３年　山本南

海女、潜り始める

午前９時ピッタリに、海女さん達はホラ貝の合図とともに白浜から潜り始めた。ホラ貝が上手く鳴らず、浜に集まっていた人々から笑いが起こった。他にも、カメラと海女さんの距離が非常に近かったことに驚き、思っていたよりも雰囲気が明るく、外からの来訪者にも開かれた祭りだと思った。

特に印象に残ったのは、海女が潜る傍ら、子どもたちが波打ち際で遊んでいたことだ。漁業者にとっての神聖な祭事であると共に、この祭りが島の人にとっては夏の楽しいイベントの一つであると感じられた。

白髭神社にてアワビ奉納

9 時 20 分過ぎに、予定していた時間の半分ほどで対のアワビがあがった。その後、奉納海女にアワビが渡され神社へ移動し始めたが、のんびり海女が潜るのを見ていた時と一転して、移動は慌ただしく感じた。新鮮なアワビをいち早く納めることが重要だったのだろうか？

アワビを奉納する白髭神社までは急な石段が続いており、底が平たいスニーカーを履いて行った私は何度か転んでしまった。そのため、今後しろんご祭りに行く人には、是非、底の滑らない靴をおすすめしたい。海での祭りとは言え、サンダルなどは止めた方がいい。

また、奉納の最中、鳥居に奉納と書かれた手拭いがハンガーと洗濯バサミで吊るされているのが目に付いた。なんとも生活感に溢れていて、神事の厳かさとのギャップがほほえましかった。

奉納が終わるとアワビが人々に振舞われた。生のアワビを美味しいと思ったのは初めてで、海水の塩気が程よくきいたアワビは、この祭りならではの味わいだった。

菅島を訪れて

1 日菅島を歩いてみて、まず坂の多い島という印象を持った。離島はみんなそのような地形なのかもしれないが、海岸や坂に沿って建物が密集している風景は見ていて新鮮だった。また、途中で立ち寄った菅島灯台は、島民の人が「うちのはかわいらしいよ」と言っていた通り、ずんぐりとした可愛いシルエットをしていた。

それから、祭りや信仰のなかに住民の生活感がふと感じとれた。神社にハンガーが掛かっていたり、玄関にガムテープでお札が張られていたり、神聖な物や場所が人の生活の延長線上にあるような不思議な印象を受けた。一方で、散策中に会った島民の人の話を聞いていると、研究者などのよその人間が菅島の何に興味を惹かれているのか、あまりピンときていな

いようだった。外から見ると独特な離島の生活や価値観も、住民にとっては無意識の習慣であることを強く感じられた。

当日の写真（撮影：吉村真衣）

「2023 年度 菅島しろんご祭り体験記」（2023 年 7 月 8 日　於：菅島）
2023 年 8 月 31 日
編集　吉村真衣（三重大学人文学部／伊勢志摩サテライト海女研究センター）
本報告書は海女研究センター事業「学生を通した海女文化の研究・教育・情報発信」の成果です